

金曜 ライフ・楽しむ

シニア世代を応援するページです

情報収集 自分の思いを表明して

わたし色

生活情報誌「悠悠と。」
編集長・真鍋康利さん



「情報」という言葉を耳にしない日はありませんね。

「情報化社会」「情報産業」などなど、最近では「地震情報」にも振り回されました。

この「情報」という言葉は、1901(明治34)年に森鷗外がドイツの兵書を翻訳する時に使ったのが最初で、「敵情の報知、報告」という意味の造語という説が一般的です。しかし、神戸大学の小野厚夫名誉教授によると、さらに古く、1876(明治9)年にフランスの兵書を当時の日本の軍人が訳した本に既に使われていたそうです。

元が軍用語で、謀報活動など秘密めいた印象があったからか、一般の生活者にはなじまなかったようで、国語辞典に「よゆうすのしらせ」や「事情のしらせ」などの意味で登場するのは明治も後半になった頃のこと。さらに時を経て、欧米から理論としての情報という概念が入ってきたことなどから、光が当たり、その後のコンピュータの普及と共に、広く使われるようになりまし。



今、辞書をひもといてみると「ある事柄についてのしらせ」「判断を下したり行動を起こしたりするために必要な、種々の媒体を介しての知

識」などの意味が載っています。

私たちは判断したり、行動したりするときに必要な知識を得るために情報を得ようとしています。いろいろな情報全てに目を通し、全てを知ることには不可能です。必要なものを、必要なだけ入手したい、でもそれが大変難しい。しかし、字面が「情報」を知りたい気持ち」と「報いる」それに応えたい気持ち」ですからそこに注目したいですね。

知りたい受け手と、応えたい送り手がいて初めて「情報」です。たぐさんの情報があっても、それが送り手だけの都合になっていないか、必要な人のところに届いている

か、知りたい形で伝わっているかが問題です。



では、情報氾濫の時代に本当に必要な情報を得るためにどうするか。その第一歩は、自分がどう生きていきたいか、どう暮らしたいかなど自分の思いをはっきりと表明し、「自分はこうしたい」と大声を上げることだと思えます。それがあってこそ、「それなら手を貸そう」「私もそう思う」などの反応が出てくるのではないのでしょうか。

今よりちょっと明るく、ちょっと元気に、ちょっと楽しく過ごすために、情報を上手に受信したいものです。でも最近、あまりの変化のスピードに「これはどこ? 私は誰? ひょっとして情報弱者なの?」と思うこともあり、取り残されないようにしなければ、と心に誓う毎日です。